



三月号



平成24年3月発行 第13号

白金蔭月例句会案内

四月二十日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第一和室)

兼題: 仏生会(花御堂、甘茶)、豆の花

五月十八日(金) 12:00 ~ 18:00 (アビスタ第2和室 ~ 第3学習室 兼題: 祭、藜(野火の菅野主宰出席の拡大句会)

六月八日(金) 12:00 ~ 15:00 (第 学習室)

兼題 蛭、玉葱

兼題の参考句 (四月月二十日分)

仏母たりとも女人は悲し灌仏会

仏生会切藁土になる途中

仏生会鎌倉の空人歩く

百代の遺伝子を継ぎ花祭

鳥たちに空蘭けてゆく仏生会

黒靴下げて布教者花まつり

ふる里は尿する油断豆の花

天までは昇れぬ齡豆の花

高熱はむらさきがちの豆の花

神々の島かと思ふ豆の花

母折り折りおとぎの国へ豆の花

いつ来ても明るき伊豆や豆の花

橋本多佳子

亀田蒼石

川崎展宏

和田浩一

仲寒蟬

前田千恵子

河野輝暉

信濃小雪

宇多喜代子

岩井久美恵

辻本俊子

光成敏子

月例句会報 (12 / 3 / 16、蜥蜴出づ、牡丹の芽) 7名(5)

飯田孝三

蜥蜴穴を出づ三輪山の登口

牡丹の芽三寸伸びて日の高し

蜥蜴出てきよろり振りむく尻尾瑠璃

ほのぼのと舌蛤となり雀

うかうかと傘寿獺の魚祭

増田陽一

風強き沼の白波鮒の声

病院を出る天皇や春時雨

白鳥の踏み跡残し本埜村

蜥蜴出づレコードの針置き直す

沈丁花香のうしろにて明滅す

増田悦子

蜥蜴出てまたルリ色の光曳く

余震過ぎまだ揺れ止まず雪柳

蜥蜴出て挨拶の如ふり向けり

牡丹の芽金魚のやうなペリコプター

牡丹の芽塀のうしろにキリンゐる

光成高志

牡丹の芽蕾を包み直立し

復興の兆しみちのくに少し牡丹の芽

町の角足停め見あぐ河津桜

地震の禍の荒れた大地に蜥蜴出づ

蜥蜴出づ寅さん堤西斜面

高圧電線鉄塔竹の秋

牡丹の芽光陰止まる時もあり

牡丹の芽ほぐるる前の芽の林

大輪を具すとも見えて牡丹の芽

光みち

田宮敦子

わが庭の四五歩で足りる牡丹の芽

漢字表に芯の加はる牡丹の芽

擁壁の穴の数だけ蜥蜴出づ

春風や移動図書館来る広場

茎立や逆さに傘の干されゐて

杉浦弥栄子

蜥蜴出づ赤提灯の裏口に

蜥蜴出づ背戸から畑に壺移し

牡丹の芽うすむらさきに童女寝る

かんぴょうが頭の中で煮えている

春炬燵メモから一句に格上げす

青木啓泰

倉田紀子

軍鶏飛んで蹴つて掴めり春の泥

おとし

男衆の酒を食ふて風日和

眼帯を外れし朝草青む

たわひなき夫との諍ひポピー買ふ

闘鶏は明日とこころへ鶏眠る

吉羽多美子

麦青む真只中に一軒家

啓蟄や猫の水のむ水たまり

古寺の山門くぐる牡丹の芽

地虫出づ若者は皆村離れ

鶯や滅法暗き女坂

嘉悦羊三

春の雲麒麟の虚空ありにけり

フルートの吹鳴縷々と蜥蜴出づ

はるけくも呉天の青さ牡丹の芽

事無しの海の静かやビギニデー

河馬あくびして春愁の始まれり

しろみそら

蜥蜴出づかかと着地の園児過ぐ

ももか

百日なるやこのほつぺ牡丹の芽

志の高くなり行くふきのたう

百坪の端に芋植う母卒寿

菜の花に下総浄土ありにけり

選句結果(数字は入選数)

4 眼帯の外れし朝草青む

3 軍鶏飛んで蹴つて掴めり春の泥

3 鶯や滅法暗き女坂

3 河馬あくびして春愁の始まれり

3 蜥蜴出づ背戸から畑に壺移し

3 牡丹の芽金魚のやうなペリユプター

3 茎立や逆さに傘の干されぬて

3 地虫出づ若者は皆村離れ

紀子

〃

多美子

羊三

啓泰

悦子

みち

多美子

一句鑑賞

牡丹の芽うすむらさきに童女寝る

光成高志

啓泰

牡丹の芽をよく見ていたら、薄紫の童女が寝ていると感知した作者の感覚に共感します。ほぐれる前の芽は、固く褐色の花弁を被り、やや遅れて縁が薄紫になり、また時期が来ると、薄紅色になり、それがヨリのようになつて林立する。それがほぐれるのはその後、ほぐれるとともに花卉の形を呈してどんどん大きくなり五月に入ると大輪の花となる。あたかも童女が美しい女君に変化して目覚めるごとく。

蜥蜴穴を出づ三輪山の登口

孝三

「わが庵は三輪の山もと恋しくばとぶらひ来ませ杉たてる門」(古今和歌集)。私の住居は三輪山の麓、恋しいなら、目印の杉の立つている門を探して、訪ねていらつしやいという歌を踏まえて、麓の登口にも蜥蜴が出る春になつた。やおら訪ねて行かむ。いやいや、もしかしたら目印の杉はないかも知れぬ。その時は紳の杖を折つて、神に捧げればよいのだ。先の啓泰さんの句を脇において、第三句として転ずれば、この孝三さんの句になります。光源氏が六条御息所に別れを言いに行く賢木の場合まで及ぶ俳句と見られます。そのように私は鑑賞しました。

かんぴょうが頭の中で煮えている

増田陽一

啓泰

干瓢を鍋で煮ながら、火元を離れて他の用事を始めなければならぬので、干瓢を煮ていることを忘れないように用心していると、頭の中は煮えている干瓢の意識に充たされ、と言つた具合。干瓢の瓜と人間の頭部とはほぼ同大だから頭と干瓢が入れ替わる、とまで言つていなか。南瓜、では俗になるし『干瓢』が絶妙で、意外性と上品なユーモアのある好句と思います。

茎立や逆さに傘の干されるて

みち

燕にもキヤベツにも花茎が出てひたすら上に伸びているところに傘が干されている。『逆さに傘』という把握で唐突に風景を逆転させるような構成に隙がなく、物体だけの組み合わせが良く、確実な効果をあげている。嘗て上野の都美術館に、洋傘を金属で作つた彫刻が長く展示されていて、『さ傘』と、諧謔のある題だつたのを思い出した。

蜥蜴穴を出づ三輪山の登口

孝三

古事記、崇神天皇の件にある、活玉依姫に通う男の行方を捜すと三輪山の神であり、その神は蛇身あつたそうなのでこの蜥蜴も怪しげで神話的な気配があり、何かの化身かもしれない。

蜥蜴出づ寅さん堤西斜面

高志

蜥蜴出づ赤提灯の裏口に

啓泰

蜥蜴がどこから出てくるかが大問題で、今週は色々のところから出てくるので忙しいけれど、それぞれ他にはない味があるようです。

蜥蜴出づかかと着地の園児過ぐ

そら

かかと着地で、颯爽と歩くことを教わった園児たちが元氣よく、蜥蜴も共に春を喜んでいるようで楽しい。

一句鑑賞(12号分)

公魚の釣れたる穴の薄氷

飯田孝三
悦子

今年は破天荒の寒気と降雪で豪雪地では除雪にえらく難儀。一方、近年は暖冬の影響で各地の湖が凍らず、実施できなかつた湖上での公魚釣りが復活し、一部で湖上名物の賑わいぶりが報じられている。さて、この句、公魚をつたばかりの穴に、おや、もう薄氷。「たる」は、それを目にした時の驚き。臍である。釣れるそばから釣穴に薄氷が張るのだ。その客観措辞が釣穴の薄氷をまざと目に見せ、湖の寒気がびりびり肌身に迫る。

二の午や幟は八本人四人

陽也

二月二度目の午の日に行われる稲荷社の祭礼。稲荷信

仰は、五穀豊穡を祈る農耕の祭祀と狐神の俗信が習合したもの。多くは氏神などより小ぶりの社殿の境内に赤い幟を立て祀りをする。集まるのはお年寄りが小人数。暫く前、ある町でこれと全く同じ光景に出つ食わした。新調の幟が十本ばかり鮮やかに風にはためき、これまた真新しい祭半纏を着た老善男老善女が数人でお祀り。二の倍数を並べ、巧まず的確に当世風俗を描写して面白い。そこはか諧謔がこぼれる。

麓から神楽囃子や紀元節

弥栄子

氏神の杜の麓から神楽囃子が響いてくる。今日は紀元節。早春の里山や民家の佇まい、春耕を待つ田畠の情景が目に見え。昭和子にとつては懐かしい景色だ。昭和も戦前の頃だろうか。かつて日本には、こういう光景が各地で見られたのである。下五はまぎれなく「紀元節」。「建国日」ではありえぬ。

ハガキ句管見(第十三報)

飯田孝三

ご開帳百観音の楼めぐる

高志

特定の寺の行事だろうか、それとも「百」は数多の謂か。(僕の田舎の近在、立野百観音(埼玉の元戸塚村、現川口市)を思い出す。昔、学童の遠足の場だった。堂塔が何基か残っている。)ともあれ、ご開帳の賑わいが目に浮ぶ。

ハガキ句十三報(06/4)

入学の背が負けさうなランドセル

妙子

日暮里の西の駅まで花十丁

孝三

幹の瘤はぼと花噴く虚子忌かな

〃

白鷺を連れて夕日の代掻機

高志

ご開帳百観音の楼めぐる

〃

春惜しむオカリナの指手話の指

敏子

幼子の後追ふ母の春日傘

〃

四月初めの忌日は面白い。一日は三鬼忌、七日は放哉忌、そして八日が虚子忌。同日は仏生会である。孝三さんの桜の幹の瘤に噴く花に虚子を象徴させて余韻が豊かである。辻桃子さんの「虚子の忌の大浴場に泳ぐなり」も諦念があつて面白いです。私はまだここまではいきません。

善男善女にかなう観光のざわめきに、出店の呼び込みの声が混じる。「百」がめでたさを湛え、有難い。「堂」ならぬ、「楼」めぐりが断然の面目。楼からの俯瞰は絵巻を繙

くに似て、蓋し天晴れ。花の雲の隙々に堂塔立ち並び、讃仰の列が引きも切らない。

「楼めぐる絵巻めぐるに似たる春」

白鷺を連れて夕日の代掻機

高志

一幅の日本画を見るようだ。はたまた、ミレーの名画を思い出させる。「連れ」が手柄である。代田作業の一日の時間の流ればかりか、男等が代掻馬を急ぎたてた昔に遡る、時代の移りを目に見せる。早乙女がうち揃うもない。田植の苦勞が減つたのはめでたいのだが、地味、文化が痩せ薄れるのは避け難い。夕映えの白鷺が象徴的地にぼつんと代掻機。青田を連想する田植機ならぬ無地の代掻機が白鷺を浮き立たせる。「白鷺の飛んで代田の日が暮れる」(孝三)

春惜しむオカリナの指手話の指

敏子

オカリナの音はまさしく春。手話のての動き又然り。奏者、話者の指の動きに行く春を見るのはさすが。でも、「く惜しむ」は口惜しい、言いたくない。主観の季語の面目は、思わぬ異質感合の妙にかかるのだが……。この句を見、初めてそう思った。が、ちよつと待て、オカリナの吹奏のとりにわけ手話の指先の忙しさと春の重さとは、まこと、対照ではあいか。オカリナに手話を重ねたのも宜なるかな。「春惜しむ」が身にしみる。「行く春の重たき琵琶の抱

きこち(蕪村)

幼子の後追ふ母の春日傘

敏子

情景がよく見える。だが、「母」は要らぬのでは。

入学の背が負けさうなランドセル

妙子

「入学の背」はできあがり。でも、中七がどうも。せいぜい「入学の背丈かうせるランドセル」か。いつか、確かNHKで、茨木和生がこんな誰かの句をとられた。少し違うかもしれないが、「ランドセルに手と足が生え一年生」

ハガキ句報再見(白金葎八号)

雨ふふむだけ重くしてねこじやらし

敏子

細い柄に太い穗、ねこじやらしは、只でさえ重たく頭を垂れる。雨を含めば、その分だけなお垂れる。その微妙な氣息を捉えたのが、即ち中七「だけ」だ。そこが命だ。なのに、「だけ」が理にかかる(17・11・16)とは、節穴も甚だしい。日頃、「微が孕む巨」「些に宿る真」などと言いながら、不明を恥じるばかりである。座五に「ねこじやらし」を置き、撓りがありありと見せるあたりも心憎い。

ハガキ句報再見(白金葎12号)

白鳥帰る村の鴉の知らぬ間に

敏子

先日、いとこお武者兄に会った時、この句を話題にしたところ、兄の受け止めは違った。「白鳥の聖と鴉の俗との対比・対照が面白い」。ぼくなりに敷衍すれば、白鳥さんは優美典雅、神の恩寵ほしいまま拍手喝采迎えられ、餌ふんだんにもてなされ

引つかえ俺たち鳥族、俗悪野卑の黒まみれ

冬は餌場もあらばこそ、人里、町へ仕方なく

ひもじさ余り出つれば、光鉄砲空銃で

キラランドン追つばわれ

揚句の果てはひつ捕らえられ、疲労魂慥、村さもりやあんりや白鳥はもういない、次の舞台で喝采か

一体全体、こりや何だ

元を辿れば気紛れな、神の仕業のこの因果

俺らはどだい知らんつた、堪忍袋がはちきれそつ

八咫様の栄光はじこへいつた

つい、鳥が筆を滑らせました。それにしても、結句、鴉の「知らぬ間に」には恐れ入る。世間の俳句が扁平に見え

る。武者解の方が、作者の気持ちに近いのでは。憐憫と諧謔の色が目に見える。(18.4.26)

お便り広場(到着順、敬称略)

白金葎句会では短い間でしたがいろいろお世話になりました。有難うございました。御礼申し上げます。突然の退会故、皆さまにはどうぞよろしくお伝え下さいと申し上げ難いですが、勝手ながらここで一区切りつけさせて頂きたいと願っています。では、失礼いたします。

(24.2.23黒田 彰一)

本日、白金葎第12号(三部)を拝受しました。「芭蕉のかるみ以後(六)」、小澤房子さんも私信で記しているように、益々佳境、親しみ易い達意名文章はわかり易く、筆者の人物を思わせる。来月は、恐縮ですが、私事で句会を欠席します。何か駄文を寄せられればと思っています。毎度、ご面倒をおかけしますが、早々と立派な仕上がり、お礼申し上げます。就中、追っかけ稿の脱字、誤字には、今更、閉口する外ありませんでしたが、びたり正していただきました。感謝々々。

(H.24.2.25飯田孝三)

「白金葎」二月号拝受致しました。見事な文章でひたすら感嘆しております。私が文章を知ったのは、戸田の定

年間近でした。超高層RCの報告書22頁だかを提出した折、半日近くかかり、真赤にされました。第二金曜日は「名画を聴く」の講義の出ています。大正12年生れ、二度の骨折がありながら、今年五年用の日記を購入されました大先生です。孝三先生、光成さん多くの人に恩恵を賜り感謝しています。(H.24.2.28小山陽也)

高志さん、こんにちは。いつもありがとうございます。とんと俳句しておりませんので、句会に出るのが〇しいですが、三月から参加します。よろしく。

(H.24.2.23しろみそら)

高志、みち様毎日寒いですね。外に出るのが厭です。習字の手本同封します。我孫子付近は地震が多いですね。気をつけてください。(H.24.2.24杉浦弥栄子)

拝啓「白金葎」に「雷魚」中の小文などいろいろご紹介を頂き有難うございます。なお、「いんき壺あり菱喰の初便り」の拙句、ほめて頂いてありますが、あれは新年会にいらつしやるといううわさだった青木啓泰さんへの挨拶句なので、「ボルネオの沖へ沖へ」といんき壺は啓泰さんの名作として夙に有名ですね。

「軽み」ということでは今は軽うぽい句が世に多いように思います。確かに「薄と軽とは違ひあるべし」ですね。僕は「重くれ」も好きなので、若いときに「俳句のケンイとさ

れる指導者はおおかた俳句を読みすぎた老人なので、手の込んだ料理に飽きてお茶漬けを良しとするような美学を初心者に押しつけるのはどうでしょうか」などと言ったことがあります。僕としては「軽み」が理想とすれば、それは「絵で言えば、^{ヴァレル}色香の整った絵ではないか？ などと考えます。

羊三さんの「山河の記憶」には多くの共鳴句があり、好きな句集です。有難うございました。いま、版画の刷りに苦戦中で、今年は「国展」のポスターの一枚に使われるので急かされています。頂いたムクロジの実、面白いですね。それではまた。陽一 拝

(H. 24. 3. 1 増田陽一)

三月の声をきき、やつと少し春が感じられるような気持ちになりました。先日、きれいな冊子をお送り下さりありがとうございました。白金葎という名は初めて聞きましたが、パンパスグラスのことなのですね。母のころへ行ったり来たりしながら「日矢」で俳句を続けていますが、なかなか思うようにはいきません。どうぞご発展お祈りしています。(24. 3. 2 宮崎晶子)

拝復 お手紙拝見いたしました。お招きありがとうございます。ご期待にそえるかどうか心許ないありますが

恐縮いたしております。野火とのご縁うれしく思いました。良子さんはお年をめしてしまいました。草豊さんも欠詠しておりますが、芳朗さんはまだ健在です。尚、四月九日にお出で下さることですが、どうぞお気づかい無用をお願いいたします。ご足労をお掛けするのは申し訳ないことです。以上用件のみにて失礼いたします。

光成様 24.3.4

菅野

高志さんこんにちは！今日はひさしぶりに自分の時間が持てました。高志俳句のページを読んできましたら啓蟄やひとひらの皮剥がるるを そら

というような心境になりました。あらら、句会報が電子版になつていますね。この三月、四月は畑に精出しながらの高志さんのビジョンを押し量りながら領いているそらです。それではまた。(24. 3. 7 しろみそら)

光成様 会費同封します。古代は別便。今月の出句はズル休みさせて下さい。伯母さんの相続は六日になつて未納の多額の税金があつて一騒ぎの末、八日全て完了しました。みんなに感謝されましたが、疲れしました。暫く休んでからボチボチと今迄ののんびりした生活に…。孝三先生と『光成さん』にかつて一日一句をと、忘れてはいませんが、生来のお忘れ者、甚だ申し訳ありません。皆様の益々のご活躍を祈ります。

(24. 3. 12 小山陽也)

光成様 「建国記念日の切株で休む」を採評下さいまして誠に有難うございました。図星で、それだけ読みこたえていたと只々恐縮です。高志氏のお便り拝読。五月十八日から二十一日まで、稲敷の商工会で台湾に参りますので、又々、申し訳なく思っております。必ず皆さんとそして菅野主宰とも御話を持ちたいものと存じます。

辻井伸行のピアノ聴きをり建国日

高志

結局のところ、この句が最高の手合い本格をもっているものと言つてもよいのではないですか。私はそのように考へ、「亜」の毎月の選を致しております。ご自愛下さい。

平成二十四年三月十二日 青木啓泰 不一

お昼 新利根商工会支所デスクにて。

受贈誌 (3月号)

朝市女冷えし地べたにあぐらかき(薊90号) 森下流子
野火放つ火のなりゆきを知りつくし(萱) 亀田虎童子
春の夜の薄桃色の付箋かな(句と批評N04) 菅野孝夫
夜の桜白し詩魂の昂りて(彩103号) 平野ひろし
輪の中に東山あり春の鳶(雷魚87号) 八田木枯
真四角な調整池に鳴来たる(あすか2月号) 山尾かづひろ

緑陰に薄目芋銭の碑の河童(飛行雲62号) 駿河岳水

俳句評論纂

・嘉悦羊三句集「山河の記憶」感銘句十五句 飯田孝三

岳

春立つや鯨の声の贈りもの
妻の忌や鳥帰りゆくみおつくし
遠蛙山の低さのしもつふさ

朧月天平人も見し伽藍

錦鯉葦簀立てかけ日は裏に

川普請鷗ときをり来てをりぬ

壽の舞

春ける安房や棚田の畦を塗る

更衣鵲天空を存分に

天地の仄と十月櫻かな

はなやかに北山放つ時雨かな

大鷹の羽搏く大氣ひりひりと

阿蘇

逆さ寒蒸かし上りの草團子

春風をゆつくり送る象の耳

青山河稚の生まるるこんにちは

待春

青梅雨や竹人形を商へる

右、感銘句二五句を更に十五句に絞つて掲げました。

・大江山寒食日記（あすか2月号山尾かづひろ筆）

京橋の仕舞屋にての中間と義母の会話形式でもつて、手習いの中身を述べている本号は面白い。源氏物語の「若菜上」に出てくる「夜深き鶏の声の聞こえたるものあはれなり」の行を解説している。私は今源氏物語の精読講座に出ているので興味深く読みました。この巻きに行くのは三年先です。

芭蕉のかるみ以後（七）

光成高志

翁曰、俳諧に古人なし。只後世之人を恐る。去来曰、古人なしとは、古へ達人なきの謂に非ず。然此道古人の姿に依て作しがたし。只日々流行して日に新に、又日新なり。此故に古人なきとひとし。又来者を恐るゝは、今日各新味さがし求と雖も、後世如何なる人出て、目出度新味を吐出さん、尤来者恥べく恐べしと也。支考が葛の松原に、誤て此を書して曰、俳諧に古人なしと阿呆は泣給、と云り。我師何ぞ如此の高慢の語有んや。常に宗鑑等宗因に至て深く尊み給事、人々のきく所也。支考が説、此を聞誤か。若筆頭を誤か。然も宗鑑・守武以来、達人世々に乏しからず雖も、此道の神に入事、只蕉翁の

みならん。

去来曰、右、翁の新味を貴み、軽教を示し給ふ。是に於て考へ玉へ。（去来、不玉宛論書）

この条は、去来が師翁の「俳諧に古人なし」という語が世間に誤解される事を恐れたのと、この語が、師翁の新風開拓の意見を一言の中に述べたものである事を告げんがために、特に不玉に書き贈つたものである。この語が誤解されやすいのは、芭蕉が古人の俳人を蔑称して、俳諧に師と仰ぐべき古人は無いのだと言つた如くにも、取られ易いが故である。それを去来は、芭蕉翁は宗鑑守武以来の俳人を決して軽蔑しているのではない。師翁はそのような高慢を言う人ではない。師をしてかかる言を吐かしためたのは、俳諧は日に新たに日に新たに新しきに向つて進むべきもので、いささかも一風に定停すべからざるものであることを、門人に示さんがためである。従つて、師翁の風に於いてすらも、過去の風に従うことを喜ばずして、新風に向う者を喜び、共に新味開拓に努力されたのである。従つて、古人の作は、それを規範としてこれに倣ふことの出来ない。これは自明な事柄である。「古人なし」とは、「ただ新しく、昨日の我に飽いて、今日の新しい味を追求するのが俳諧の道である」と言われたのと同じの意である。言葉をかえて言えば、自己の旧風を洗

い旧染を雪ぐことである。新しさを求めることは、旧染を洗いこれから脱却することである。その旧染を洗う事とは、往事の重い句風を踏み破ることであつて、重味を踏み破らんがためには、軽味に移る事を措いて出来がたいのである。だから、師翁の新味を賞し、軽き教えを示し給ふ意を了解せられよ、と述べているのである。この去来の語は、「俳諧に古人なし」という語を、芭蕉の真意に立入つて解明したものである。現在の我々の作句の心構えや更には実人生をわたる心ばへにもよく染みとおる言葉である。「俳諧に古人なし只後世の人を恐る」、これが芭蕉の簡潔にして、軽みを説く別な言い方であつた。

我孫子日記

2/17例会。2/24保健センター。2/29SOA。3/2八重洲。3/4銀座。3/7SOA。3/9湯島*。3/12我孫子。3/13青山六本木*。3/14SOA。3/15銀行。3/16例会。

*湯島天神吟行句会(萱)

春泥を飛び越す巫女の傘さして

梅祭り終はりし後の屋台かな

夫婦坂上れば雨の梅匂ふ

四方より坂あつまつて梅の花

みち

敦子

高志

嘉男

万太郎も棲みし梅の男坂

一舂人

花馬酔木鏡花の塚に寄りそうて

敬司

*草月造形科作品展

ビル群の六本木なりクロッカス

みち

舊乃木邸棗芽吹きて鳩飛べり

敦子

行灯の美しき絵桜海老

〃

榮昌の花魁行灯雛納め

高志

乃木夫妻殉死百年春の鶉

〃

原稿募集

句会報の中から一句一句選び鑑賞文を発行所まで、ハガキかメールにてお届けください。俳句特別作品は十句、評論、エッセイなど、又は季語に纏わる生活逸事などを書いてお寄せ下さい。当分十六頁中綴じ製本型で編集します。多ければストックして順次掲載します。

編集後記

五月の兼題を練供養から祭に変更したので、祭の取材をせんと浅草に出かけた。三社祭は五月と心得ていたのだが、今年は三月にあるというので、十八日に出かけたのであつた。行つてよかった。三社祭は、正和元年(一二三一二)に、三社の神話に基づき行われた舟祭がその起源といわれており、今年、平成24年(二〇一二)は、700年祭

となるのか。これを慶賀して、本来の舟祭を二年の準備を掛けて、本来の三月に挙行したのであった。舟渡御のその前は昭和33年(一九五八)であるとか、実に54年ぶりに再現したということであった。三社は観音像を網ですくった、檜前浜成ひのくまのはまなり・竹成(たけなり)兄弟と、それを鑑定した土師中知(はじのなかとも)である。初め槐の切株に安置して拝んでいたのを、土師中知に見てもらったところ、これぞ、聖観音菩薩の尊像であることを兄弟に告げたそうです。そこで近くの百姓達は藜のお堂を建ててその像を祭り、びんざくら舞を踊って祝ったとされている。これは、推古天皇36年(六二八)の古い出来事であった。ここに、兼題にした、藜が出てきたのにも不思議な縁を思った。藜は飛鳥時代に既にあった植物であったのだ。

特別作品

増田陽一

作者註

- 一句目 南国に死して御恩のみなみかぜ(撰津幸彦)の句あり。
二句目 さとうきび畑(森山良子)の歌から。
三句目 沖繩戦で多くの女性がこの岬から入水した。

喜屋武岬 きやん

増田陽一

琉球孤一島づつのみなみかぜ

砂糖黍葉擦れの声は人のこゑ

夏蝶に骨なかりけり喜屋武岬

青羊歯やここに死したる少女隊

ひめゆりの孫に道聞く夏の果

戦禍語らざれ洞閉ざす榕樹の根

幼霊の拠る御嶽なり樹雨して うたき

半島を勁く曲げたる御嶽夏 うたき

ただ搾る酸性柑の沁みる夏 シークワサー

首里城の朱は痛しや旱雲 あけ



三社祭舟渡御(H. 24. 3. 18)

誓子俳句翻訳（1） The Essence of Modern Haiku 300 Poems by Seishi
Yamaguchi(1993)より転載

落花とぶ 時の外には 生きられず

Blossoms in the air
unable to stay longer
and still escape time.

Composed 1955.

Cherry blossoms are flying through the air. Their movement is controlled by time. This is true not only of plants, but of human beings too. We cannot escape the world of time.

白金菖 第13号 平成二十四年三月発行 表紙の題字:嘉悦羊三。写真は白金菖
編集・発行人 光成高志(FAX 04-7187-1068)
発行所〒270-1119 我孫子市南新木 2-14-17